

国際シンポジウム「試練と可能性のメディア： それでも君はジャーナリストを目指すか」開催報告

中村登志哉

メディア・プロフェッショナル講座としては初めてとなった国際シンポジウム「試練と可能性のメディア:それでも君はジャーナリストを目指すか」を11月26日(金)午後3時から6時までの3時間にわたり、文系総合館カンファレンスホールで開催した。名古屋大学教育奨励費と国際言語文化研究科プロジェクト研究費の助成によるプロジェクト「グローバル時代のジャーナリズム教育」(研究代表・中村)の一環である。グローバル化とデジタル化の進展に伴うメディアの変容とその政治的・経済的・社会的影響について、日豪韓3カ国の研究者が最新の分析を発表し討論した。

前野みち子研究科長による開会の挨拶の後、メルボルン大学のティモシー・マジヨリバンクス准教授、翰林大学の崔英宰准教授、私がそれぞれオーストラリア、韓国、日本の現状分析と展望を発表し、春名幹男・特任教授が討論者としてコメントした。インターネットの登場以来苦境が続く新聞などの伝統メディアが生き残りのためにどんな変容を遂げているか、各国のメディア政策はどう変化したか、市民の政治意識や政治コミュニケーションはどう変化したかなどについて報告された。発表は基本的に英語で実施され、サイマル・インターナショナルの通訳者である宮西涼子さん、高野真理子さんによる同時通訳が付された。会場では中部地方のほか仙台や東京、京都、広島からの研究者、本講座に協力していただいている中日新聞社、日本放送協会(NHK)、電通、東海テレビのほか、朝日新聞東京本社、中部日本放送(CBC)など在京・在名古屋の新聞社・テレビ局関係者を含む約90人が出席し、活発な論議を交わした。議論は予定時間をオーバーするまで続いたが、講座主任の池側隆之准教授が閉幕の挨拶で、今後も引き続きメディアの変容を鋭くとらえ、本シンポジウムに続く取り組みを企画し、今回ご来場いただいた研究者やメディア企業関係者らの皆さんとも密接な関係を維持して、存在感のある研究教育活動を展開していく所存だと述べた。

シンポジウムにおける発表論文および議論の詳細を収録した本プロジェクトの報告書『Challenges and Chances for Media: Does anybody still want to be a journalist?』(英文、全110頁、名古屋大学刊)は2011年1月に刊行され、濱口道成総長に提出された。



(写真1) 右から中村、マジョリバンクス、崔、春名の各氏 (撮影・何思穎さん)



(写真2) ほぼ満席となったカンファレンスホール (撮影・謝小建君)